飜刻

新体詩歌

竹内隆信編輯

第五集

新體詩歌第五集跋

登高必從低焉行難必從易焉故治天下之事物必有順序々々何那曰當行事物之日不可必欠者恰如涉河海必用船舶也夫助國家開明進人智發達則在于學矣雖然學有難易故初學修之隨其順序從易及難而勉之則易覺而易學也然余觀察當時人情百事唯期速成不顧其順序等直學難而措易以其困難不可言於是乎遂半途而挫折其志不達目的者甚多矣譬若登梯子追序隨段而不蹈之直將飛越達其上則有陷墜之憂而無上達焉夫然然則豈焉得爲國家開明進步之裨益哉方今我國行民間彼俚歌俗謠是其最易々耳兒童謠之走卒誦之而猶感發人心不鮮少矣然未有我國翻譯泰西之詩歌而公世焉是余等所常爲遺憾也今也竹內君有志于此蒐集係諸大家翻譯之

泰西詩歌與我本歌而名曰新體詩歌既有第四集之編焉今又第五集編成示余且徵跋余受而誦之風調温雅能得其体而語甚不高一誦之解其意也而熟讀玩味則覺字々有慨慷句々如金玉鏘戛餘音溺々意味益深長然而一章快一章讀未半不覺拍案曰噫是眞天下之快歌也余前所謂俚歌俗謠猶感起人心不少然況於此集乎一流布民間則感動人心發舒其志氣而人々抱進取之氣象至逐探學文之深奥以進我國文明之度照々明於見火矣然則此集益於世敎果幾許哉感激之餘聊述鄙言以爲跋

于時明治癸未八月上浣唇交櫻陵居士廣瀨要人識

新体詩歌第五集序

形象粲然皆ナ寫シ出スヘキ者ハ玻璃鏡ノ巧ナリ清濁ノ音互ニ和スヘキモノハ太筒琴ノ妙ナリ夫レ玻璃鏡ノ寫大筒琴ノ和巧ハ則チ巧矣妙ハ則チ妙矣然リト雖モ長ク其ノ形聲ヲ留ムル者ニアラサルナリ今ヤ二者ノ巧妙ヲ兼ネ數千百歳ノ後ニ垂レテ而滅絶セサル者アッテ存ス焉其レ唯、詩歌カ紀伊ノ人竹内君洋ノ東西ヲ問ハス時ノ古今ヲ論セス諸名家ノ詩歌ヲ網羅シ嚮キニ既ニ四集ノ編アリ命シテ新体詩歌ト云フ頃ロ又第五集成ル卷ヲ開ケハ則チ粲然奐然然シテ以テ目ヲ喜ハスヘキモノアリ鏘然鏗然以テ耳ヲ娛マシムヘキ者アリ千樣万態一ニシテ足ラス其他聲律ニ應シテ而性情ヲ寫ス如キニ至ッテハ能ク鏡琴ノ寫ス能ハサル所ヲ寫ス者而喜怒哀樂不平無聊ノ意見ハル焉玻璃鏡モ其ノ巧ヲ賞スルニ足ラス大筒琴モ其ノ妙ヲ擅ニスル能ハス詩歌ノ聲形百

世ニ傳ヘテ而益高明ナラントスルナリ嗚呼後ノ此ノ編ヲ讀ム者魚龍曼衍ノ戯ヲ觀ル如ク黄帝咸池ノ樂ヲ聽ク如ク心目眩亂精神酣暢奇ト稱シ快ト呼ヒ樵漁婦女ノ愚ニ至ルマテ皆ナ詩歌ノ樂シムヘキヲ知ラン詩歌ノ樂ムヘキヲ知ラハ漸ク遙カニ學ノ門墻ヲ望ムヘシ然ラハ則チ此ノ書ノ出ツル天下ノ文運ニ關スル輕カラス矣其ノ体裁ノ如キハ舊樣詩歌ノ解シ難キニアラス極メテ簡易ニシテ皆其ノ趨キヲ新ニシ別ニ生面ヲ開テ人ノ意表ニ出ツ名テ新体詩歌ト云フ固ヨリ其レ當レリ矣序ヲ徵スルニ及ヒ再三辭スレトモ得ス終ニ書シテ以テ其責ヲ塞クト云爾

于時明治二八歳癸未八月中浣　　蜻民首藤次郎識

新体詩歌第五集

目次

○世渡りの歌
○夏夜即事
○送學友歸鄕歌
○見燭蛾有感
○湘南秋信
○チャールスキングスレー氏悲歌
○詠松島歌
○佐久間象山謫居の歌
○西南の役より凱陣せし人を祝するの歌

○詠石菖歌

以上十篇

新体詩歌第五集

解谷竹内節編纂
蜻民首藤次郎校閲

○世渡りの海

小川健次郎

よくも出來たり實のりたり　往來の人も稲のなみ
わけて今年の秋穫を　見れば農ほどよき業は
又とあらしな國本も　こゝに基ゐし民命も
こゝにかゝると聞からに　劒をうりて鋤をかひ
すき返しても長き日の　腕も肘も脱けさうに
それのみならず霖雨や　旱に水のかけ引や
夜の目も寢ずに引板の番　さるに一日野も山も
野分の風の無慙やな　泣にもなけず取分て

世の常なきをかこつより外に詮術なかりけり
嗚呼六つかしの世渡りや
物うる業はむかしこそ賤しといへど今の世は
圖の光も身の幸をもとむる道もこの外に
あらじときけば矢も楯もはや溜らじと投ゲすて〻
輸出輸入の平均や彼に得られし商權を
とりもどさんと健氣なる胸算用の正鵠は
あへなく外れ幔幕の設け處か埒もなく
賣れば借りられ買へは損杖とたのみし資本も子も
きへて果敢なき雲霞あらしの庭の花紅葉
世の常なきをかこつより外に詮術なかりけり
嗚呼六かしの世渡りや

棹一本に浮々と此所の泊りや彼所の港
遊びがてらに渡らるゝ舟子も暴風の危險あり
危險を怯ぢず畏れずに名譽の海に乘り出し
日頃の伎倆顯はすはいと易けれどそれとても
よるべき蔓を求めねばよし覓むとも其蔓も
共に根はなきうき艸の憂き艱難をよそに見て
誘ふ人なき身の不運はり裂く胸を押鎭め
月に嘯き花に醉流るゝ水を友として
世の常なきをかこつより嗚呼六づかしの世渡りや
世わたる業は多けれど彼に利あれば此に害
つきて廻るは諺の畔を走るも田を飛ぶも
おなじ羽色の蝶鳥はおろかな事よ細虫すら

其生活は習ふより　なれし手業を怠らず
傍目をふらず一すぢに　あすはけふよりあさつては
又あすよりと工夫して　祖先の立てし計畫と
其熟練の遺傳とに　光りを加へ漸くに
勵み進めばおのづから　我をしらずに一日より
一日と樂に傍目より　羨やむこゑをきく時は
嗚呼いとやすの世渡りや

○夏夜即事

小川健次郎

晝の暑はゆふ立に　あらひ流して峯高く
かゝやく月に置わたす　千艸の雪のはら〳〵と
玉を欺く玉たれの　小簾の返しに吹ちりて
いとも涼しきむら竹の　葉越しに秋や來ぬるかと
疑ふばかりおと細く　庭の筧もきこゆなり
千ひらの金と一刻を　惜みし春の宵よりも
猶明け易き夏の夜の　價を誰かさだむべき
口さかなくもおろかにも　夏はうるさし又暑し
蚤蚊や蠅と打つけに　貶していふはいはずして
おもひを焦す螢火や　昔の人の袖の香を
しのぶ軒端の橘に　はつねをもらす郭公
訪ふ人もなき草の戸を　叩く水鷄にやぶらるゝ
物の哀れをゆめにだに　しらで寢過す人ならん
靜に觀れは四ッの時　うつり變りて物ごとに
われを慰め樂しまず　深き方便をゆくりなく

今日のあたり覺へたる
つゝむとすれど夏衣
其嬉しさと樂しさを
吹返したる峯の松風

○送學友歸鄉歌

五年六年諸共に
互に勵みはげましつ
光のどけき春の日や
五月雨晴れぬ夏の日も
いとゝ樂しく過しきり
月日の流れ早くして
昨日諸共住みなれし
五年六年とく立ちて
學びの舍を出たりし

大竹美鳥

同じ學びの窓の内に
慰められつ慰めつ
月かげ清き秋の夜や
雪ふりしきる冬の夜も
いとゝうれしく暮し鳧
明日は旅路に出る船の
かしまだち今祝ふなり
いざやほせ〳〵其酒を
ともなり師なる君達の
祝の酒をすゝむなり
いざやくめ〳〵此酒を

歌へや舞へや皆共に
今日を限りぞ明日よりは
敵といふは忌言葉
繊きも難き事ならず
聲をば雲井にあぐるなる

舞へや歌へや諸共に
又逢ふ事の易きやは
雲をも排く心あらば
月の前ゆくほとゝぎす
あれ見よ高く上るなる

さはいへ心有明の
行衞思へばうたてやな

月影かくす村雲の
浮世の事に似たる哉

朝は淺間の烟かも　暮は鞍馬の霞かも
天と地との間をば　家となしつゝ過ぐる身は
隔てはあらじ西東　北も南もみな同じ

同じ團坐の友人よ　雲になやめる月を見よ
浮世の事は何事も　思ふまゝにはならぬとも
さりとて心おくらすな　耐へよ忍べよ怠るな
斯くして後に思ふ事　かなふ者とよ見よや人
風ふき拂ふ雲間より　月は出たりあらはれたり

嗚呼面白の景色やな　そぞろうき立つ思哉
明日の別れのいとつらき　愁を掃ふ玉は、き

取れや人々酌む酒の　つきぬためしも有磯海
深き契りを忘るなよ　寐ずやあれや今宵一夜
月もろ共にやすらはで　歌へや舞へや明るまで

○見二燭蛾一有レ感　犬山居士

時しも夏の闇の夜に　文書んとて我庵の
東の窓の其下に　燈ともせば庭の木の
涼しき風を送り越し　衣を通し吹くにつれ
いと美しき蝶々の　翻めき來り燈みて
取らまくぞする有樣を　見れは悟の有磯海
深く心に藏め置き　守らんとする事ぞある
抑も難を企つは　惡きことにはあらねども

又其本を見ざりせば　今しも來たりし蝶々の
等しき業やなすならん　燒ても思ふ其火をば
取まくするは愚ならずや　死しても難き其事を
なさまくするは愚なり　其身ありてぞ事遂ぐる
其身失せては遂がたし　されば撓まぬ心をば
しめて其身を燒もせず　死しもなさぬ道をとり
進みて後にほまれ得て　後に鑑を殘すべき
名譽の人と呼ばはれん　名譽の人と呼ばはれん

○湘南秋信　鈴木劵太郎

昨日けふと思ひしも　早二月の旅衣
旅にはなれぬ苦しさよ　眺むるものは空の雲

雲の通路斷えずとも　斷え〳〵なるは文の面
あすは來にけん友だより　あさては又親や妹も
たまにはあれど其れさへも　要事のけては何もかも
有るものとては無りけり　まいて王子の紅葉だも
いかに見もものか其とても　想ひやるのみ詮術も
泣くになかれず兎や角と　案じ暮すは愚かゝも
知るや知らずや秋の霜　千艸にか、り照月も
哀れを見舞ふ氣合なり　木の葉の落る音づれも
あるは馬入に馬を侶　または雨降に雨に菰
大和心のやる瀬なき　思案なげ首池の鳧
都の人にしらせんも　外にはあらじ是はそも
今年のみのり豐けさよ　民の命のか、る紐

來るや春の事までも　嬉しく思ひ云まくも
君が代なれや有がたし　白きを語る丹き肝
田舍の住居よし然かも　露の惠みの深きにも
醉て管まく其代り　東京の模樣知らせたも

蜻民評云詞句精巧押韻自在敬々服々

○チャールス、キングスレー氏悲歌

外山仙士

無常を告ぐる入相の　鐘の音するたそがれに
三人の漁夫は帆を上げて　入る日を指して西の海に
走らす船は進めども　妻子の爲に引かさる、
心の中は皆同じ　父の出船を眺めつ、

沖に向ひて行めるまうけは薄く子澤山
洲に打掛くる浪音の　童子は外に餘念なし
かせがにやならぬ男の身　雨の降る日も風の夜も
最とすざまじき其時も　袖のひぬのは女子の身

三人の漁夫の妻三人　日も西山に入相の
鐘もほのかに聞ゆれば　共に籠りし燈臺の
火を挑んと立寄りて　つまめる心の夫思ひ
窓の戸開けて眺むれば　驟雨やら暴風やら
空打過ぐるむら雲の　色黑々と物すごし
暴風は如何に吹けばとて　水かさは如何に增せばとて
洲に打掛る浪音は　如何程すごく聞けばとて

かせがにやならぬ男の身
袖のひぬのは女子の身

朝日かゝやく砂磯に
潮引き去りて其跡に

殘るは三つの屍そ
三人の漁夫の妻三人

歸らぬ旅に門出して
歸らぬ夫のなきがらに

髪振り亂し取すがり
消る計りに泣き入りて

目もあてられぬ風情なり
かせがにやならぬ男の身

袖のひぬのは女子の身
一日も早く世を去れば

一日も早く樂をせん
屍の跡の砂磯に

寄せ來る浪の碎けつゝ
鳴りたきや鳴れよゑゝ儘よ

○詠松島歌

遠藤信道

島はしも　多許あれども　浦はしも　多にあれども　陸の
奥の松島の浦は　島からか　眞細き島　浦柄か　愛き浦
其浦の　小島の崎ゆ　打見る島のさき〳〵　搔見る磯
の崎おちず　船浮て　廻らひ見れば　小女の　眉曳なし
て　寶が崎は　南へ奔り　鹽尻を　伏たる如く　富山は
北へそゝり　西へ空　振放見れば　飛鴈の　大山そびへ
東を顧みすれば　宮戸の蛇霞峯立り　こち〳〵の　其山
の間に　百八十の島こそ並べ　夕煙　霞の浦　淺緑　青
柳の島は　時自久に春めく島か　久方の月見の崎　茜指
桂の島は　常しへに　秋立島か　火打島　附木の島は
夏の夜に　海士の焚なる　漁火の　殘れる影か　風冴る

寒風澤の湍と　浪騷ぐ龜島の磯は　嵐吹　冬の餘波か
玉手箱　二子の島は　二並び　睦しみ見ゆ　丈夫の　鎧
の島　武夫の兜の島は　彌猛く　雄々しくみゆ　腰細の
天女の島　白髮附翁の島は　宜しけく　向ひて居れり
八千矛の　大國島　鯨釣夷が島　兄弟か　並びて立り
竹の浦來よる白玉　福浦にいよる　玉藻を　深海松の袷
ひてあれば　潮垂る苫屋の汀　わひしとも　海人は思は
ず　盜人と人は雖言　崎みれば　豐に立て　物掠む懷
もなし　蛇崎と人は雖言　崎みれば　長閑く出て　物ら
呑さかむ口なし　雅士の墨畫の島　鴉島の潛きが浦と
風雅に負る島の名　ふさはしく　負る浦の名　うべなう
べな松島の浦は　眞細き島の眞秀島　愛しき浦の　眞浦

と　神代より　今の現に　語繼　言繼けらし丸木船　榜
もとぼりて　萬段顧すれど　見ル　毎に飽ぬ島かも　あかぬ
浦島

反歌

松島の八十島かけて榜行ば
浪の穗のへに黃金山見ゆ

○佐久間象山の謫居の歌　佐久間象山

信濃路は　ひなにはあれど　うらくはしやまにものにも
はるされは　はなさきを、り　秋つけは紅葉にほへり
そをめで、のゆき山ゆき　あまつ日の　くる、もしらず
遊ぶなる　人もさはなり　しかれども　さすらふるみは

春の野の　花もかざさず　秋山の　紅葉をも見ず　たら
ちねの　は、のかふこの　まゆごもり　こもりてながく
年ぞ經にける

反歌

君がためたちはしりせむすべをなみ
あたらよはひのおいらくをしも

○西南の役より凱陣せし人を祝するの歌

久方の　空も長閑に　あら玉の　春を迎へて　秋津島
風も靜に　祝ひつる　程もあらせず　武士の　八十氏川
に　立さわぐ　波のよるひる　いとまなく　君は臣らを
引連れて　臣は君にと　從ひて　軍の庭に　魁かけて

打つ討れつ　そがなかに　實にいさましき　大丈夫の
わかきはらから　二人づれ　向ふ矢庭に　飛くるは　雨
の霞か　白瀧の岩をも碎く　黑鐵の　玉に當りて　はら
からは　世になき人と　なりにきと　古郷人は　傳へ聞
き皆打寄りて　歎きいる　打しも事なく　歸り來てめぐ
り逢瀬の　ありけるは　ますらたけをの　潔ぎよき倭心
を　しろしめす　弓矢の神の　惠みにて　いさを、世々
に遺すなるらん

反歌

くろがねの玉もかほらす大丈夫が
君につかふるやまと心は

○詠石菖歌　滋野貞融

おほよそもの御國にありながらこゝの名はなく漢籍に見ゑたるその名をもちゐるたぐひかずすくなからずなむある石菖はたそのひとつなるべしかゝるたぐひは文詞にこそ石菖などかきもすれ歌詞にはよむべきならねばそのたぐひにつきてあやめ草といはむからにたれあらずとしもいひてうべなはざらむしかはあれどなほまぎれぬべければそのいはほにおふるにつきて私に名つけて岩あやめといふそのうへかしこに緑劔眞人また劔脊草などいへるもをかしければこゝにもまたの名をつるぎ草とやいはまし山本晴香石菖をおくれり字を正宗といふこれなむわが家の正宗

なりけるかくいふは天保八年水無月

古の道ふみまなぶかたはらになに手はなさむつるきたちとればをゝしくそのにほひみればおかしく村肝の心はゆきぬ神代よりこのつるぎたちつくるとふ人はおほけれ人の世のよは末ながら鎌倉の正宗こそは此道の聖なりけれそのをしへうけつかひてし義弘は亞聖則重はかしこかりけりわが家にもちつたへにし義弘の作れる太刀はわかゝりしほどのすさびにつくりつるものにしあれば此道の物識人にしめすべきものならなくにわれひとりめでゝこそあれ源のはるかの子とふみやびをがもちつたへにし則重がつくれる太刀はむかしこの川中島にますらをの名をとゝめたる山本の老翁がものかも遠祖の名代とあがめ

今の世の人にしめせりわれさへもみれはうるはしうるはしきわがはらからがつたへたるその則重どわがもたるこの義弘もはらからのつらにしあればこの子らが親としきこへ此道の聖（ひじり）といへる正宗がつくれるこそはゆめにだに見まくほりすれいかにして見るをを得むいかにして手にはふれむとつねにしもおもへるおのが心をばしる人ぞしる窓の内にそのひめもたる岩あやめ草はおほけれいつのよにいかなる人のすさびにか名を正宗とたゝへけむつるぎなしたるつるぎ草われにおくれりむなかたは緑すゝしくはがたはもしろくにほへり朝（あした）には眞清水たゝへそのさまのにほふをぞ見る夕ざればともしびかゝげ其つゆの玉をこそ見れ正宗かそはしらねども末の世のすがたにはあらずこれを見る我こゝろこそみな人の得かてにすとふ正宗を得しこゝちすれ枕太刀たちにならべていにしへの道ふみまなぶかたはらにこれをしおきてつねにかも見舞

新体詩歌第五集畢

明治十七年四月廿三日飜刻御届
同　年五月出版
（定價金八錢）

編輯兼原版主　和歌山縣平民　竹内隆信

飜刻人　山梨縣平民　内藤傳右衛門
西山梨郡常盤町四番地